

オンライン診療の実際 婦人科

医療法人田村秀子婦人科医院院長

田村 秀子

（聞き手 大西 真）

大西 まず初めに、田村先生のクリニックではいつぐらいからオンライン診療を始められたのですか。

田村 2015年ぐらいから、テレビ電話などが無料で使用できるソフトウェアなどを使いながら、ぼつりぼつりと始めていました。政府から、遠隔診療は僻地を示すだけのものではないとの方針が出てから、ベンダーの力を借りて本格的に始めました。

大西 随分前から取り組んでいらっしゃるのですね。

田村 そうですね。

大西 今コロナ禍で、やむを得ずといますか、あちこちでオンライン診療を始めているところもあるようなのですが、数年前からやられていたのですね。

田村 はい。

大西 普通に考えて、婦人科は内診などの診察がどうしても必要だと思われがちですが、そのあたりはオンライン診療でどのような工夫をし実践されているのでしょうか。

田村 婦人科では確かに内診が必要なことは多いのですが、逆に内診が必要なものに関してはオンライン診療は不向きですが、例えば更年期障害や月経困難症、あるいは不妊症のカウンセリング系統のことなどは内診を必要としない場合も多いですから、そういうことに関してはオンライン診療で取り組むようにしています。

また、婦人科というのはどうしても若い方、あるいは結婚していても、まだお子さんがいない方には敷居が高いのですね。ですから、行きたいけれども人に見られたら嫌だとか、そういうことでなかなか来にくい方は、コロナ禍になってからオンラインの初診で相談なさる方も若干増えてきています。

大西 オンラインのほうがわりと気楽といますか、自然なかたちで相談しやすいのではないかと私などは思ったのですが、実際はそういうケースも多いのですか。

田村 そうです。私は女医ですので、

男性医師に比べたら診察室でも言いにくいわけではないだろうと思うのですが、診察室にいると少なからず緊張される方はいます。そういう方にとっては、自宅からつなぐのは緊張感が少ないことはあるようです。

大西 その過程で、必要があれば実際に来ていただいて、オンラインと実診療をうまく組み合わせるかたちになるのでしょうか。

田村 そうですね。血液検査等々が必要なときには来ていただかなければいけませんし、どうしても時間がない方などは血液検査だけクリニックに来ていただいて、後日、オンライン診療においてその結果のお話をするようなかたちで、診療所の中でとどまっている時間をなるべく短くするなどの工夫もしています。

大西 今は特に新型コロナウイルスがはやっていて、なかなか診療がしづらくなっていますが、何か現場で工夫されていることはありますか。

田村 婦人科の外来としては、発熱して新型コロナウイルスを疑う人は逆に来ないですから、そういう意味では一般の内科の先生とは若干違います。ただ、今は発熱外来センターから我々のところにPCR検査の委託をされることがあります。そういうような場合はオンラインで発熱外来をやっています。オンラインで話を聞いて、本人確認、保険証の確認もして、場合によっては

クレジットで前払い決済をして、PCR検査に来られたときには動線として本当にワンウェイで、往復するようなかたちにします。対応するスタッフも、院内にとどまる時間も最少で済みますので、そういう意味ではオンライン診療はとても役に立っています。

大西 婦人科のクリニックでもPCR検査をやられているとのことで、私は少しびっくりして感心したのですが、かなり積極的に協力されているんですね。

田村 そうですね。当院は不妊が専門ですが、そういう患者さんだけではなく、なるべく発熱患者がたくさんないところに行きたいと思われる女性も多いと思うので、そういう意味で受けています。

大西 先生のところは特に不妊治療に力を入れていらっしゃると思うのですが、オンライン診療はどういう場面で活用されているのでしょうか。

田村 もう6～7年前になりますか、私がオンライン診療というか、テレビ電話などが無料で使用できるソフトウェアを使って始めた一つの理由ですが、体外受精をした後に妊娠判定をして、それでマイナスだったら、みんな落ち込んで、ぼうっとして帰ってしまうのです。ですから、そういう状態になったりしたときに、自宅でテレビ電話のかたちで話をすれば、もう少しリラックスしていろいろなお話ができるかと

思ったのが最初だったのです。

今は妊娠判定をしてもまだ超音波で妊娠がきちんとわからないような時期は話をし、薬を郵送して、実際にだめだったときには悲しい思いもしますから、そういうところは病院に来ずに対応できるかたちにはしています。それ以外にも、不妊の患者さんには精神的なケアがとても必要ですので、当院のカウンセラーからオンラインカウンセリングをする際にも使っています。

大西 きめ細かな対応で素晴らしいですね。かなり精神的なサポートもされるということですね。

田村 そうですね。

大西 治療を何回も繰り返される方もいらっしゃるよ。なかなか苦労されているケースも多いかと思いますが、そういう場合もオンラインを使って支えているのですか。

田村 必要なことだと思っています。不妊症はどうしても体外受精などをするとき、卵胞の大きさがどのくらいかを検査して見なければいけないですから、不妊症の方をオンラインで行うのは実際の診療のところ以外の部分で使うことが多いです。オンライン診療で使うのは若干特殊かと思いますが、いわゆる医療として使うというよりも、そういうサポートとしてのほうが多くなります。逆に不妊ではない方々、若い患者さんの月経困難症や更年期障害というあたりは結局、ずっと継続して

服薬していただかなければいけないのです。

内科の高血圧、糖尿病の人たちは、自分の生き死にに関係しますから、きちんと薬をのまれるのですが、月経困難症は生理のときだけで、生理痛の薬をのめば何とかかなと思う方は、LEP製剤というピルのようなもので排卵を抑制していく治療が一番効果的で、毎日薬をのんでいただかなければいけないのに、「あ、忘れちゃった。薬を病院に取りに行けない」となり、あっという間に生理が来てもうのめなくなる、という感じでドロップアウトするので

そうすると、継続的な治療につながらないので困ります。そういう点ではオンラインでつないで、薬は院内処方を実薬を郵送すると、皆さん、薬をずっと続けていくことができます。更年期障害も同じですが、そうやって継続していただくことができるので、子宮内膜症や月経困難症や更年期障害といった軽微なもの、でも継続しなければいけないものに関しては、オンラインはとても効果的だと思っています。

大西 今はコロナ禍でなかなか病院にいらっしゃらない方もいて、内科でも途中で薬がなくなってしまい、しばらくのまなかったというケースもあります。そういうものが防げるのですね。

田村 そうですね。

大西 あと、よく緊急避妊というの

が社会的に問題になることがあります。これもなかなか敷居が高いと聞いているのですが、先生のところではオンラインを使って何か工夫をされているのでしょうか。

田村 緊急避妊薬に関しては、72時間以内のむ。72時間たってしまうと、その確率は50%ぐらいなのです。ですから72時間ではなく、可及的早急がいい。一番いいのは、近くのすぐにももらえるところに行ってもらいたいと思います。けれども、近隣にないとか、どうしても行くのが恥ずかしいという場合に、オンライン診療というかたち

でやっていけばいいかとは思いますが、残念ながらオンライン診療の場合には支払いの問題があります。例えば中高生のような、親にも知られたくないし、でも学校にも言えないし、学校がある間は病院にも行けないしという子たちはクレジット決済もできません。なかなか現実的でないところもあって、それはオンラインがどのくらい効果的なのかということになると、また違うかなという気もしてはいますが、使えればいいと思います。

大西 どうもありがとうございました。